

※ 解答は、《解答欄》に書きなさい。

ポイント

- ・ 作品の特徴を生かして朗読し、古典の世界を楽しむ。
- ・ 場面の展開や登場人物の描写などに着目し、文章を解釈する。

雨宮さんたちは、文化祭のステージ発表で徒然草を朗読しました。次は、その方法と原稿です。

1 方法

(分担)

- ・ 説明：雨宮 ・ 古文の朗読：雨宮、大谷、小山、石田 ・ 現代語訳の朗読：深川

(立ち位置)

- ・ 雨宮：ステージ左手前方 ・ 深川：ステージ右手前方 ・ 大谷、小山、石田：ステージ中央

2 原稿 ※ (一) ～ (四) は、場面を表す。

雨宮 僕たちが発表するのは、徒然草第八九段「猫また」という話です。

(一)

小山 「奥山に、猫またと①いふものありて、人を食らふなる。」

▽ 現 「山の奥に猫またという化け猫がいて、人を食うそうだ。」

雨宮 と、人の言ひけるに

▽ 現 と、人が言ったとき

石田 「山ならねども、これらにも、猫の縫上がりて、猫またに成りて、人とることはあるものを。」

▽ 現 「山でなくても、この辺りでも、猫が年を経て猫またに成つて、人を食ふことがあるらしいよ。」

雨宮 と言ふ者ありけるを、

▽ 現 と言う者がいた。

(二)

雨宮 何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、

▽ 現 その話を何とかの阿弥陀仏という名前で連歌をやっていた、行願寺のそばにいた僧が聞いて、

大谷 「ひとり歩かん身は、心すべきことにこそ。」

▽ 現 「一人で出歩く自分のような者は用心しなければならない。」

雨宮 と②思ひけるころしも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川の端にて、音に聞きし猫また、あやまたず足下へふと寄り来て、やがてかきつくままに、首のほどを③食はんす。

▽ 現 と思っていた折も折、ある所で夜がふけるまで連歌をして、たった一人で帰った時に、小川のふちでうわさに聞いた猫また(……)ねらいを走めて足下へさつと寄つて来て、いきなり飛びつき、首のあたりに食いつこうとする。

(三)

雨宮 肝心も失せて、防がんとするに、力もなく足も立たず、小川へ転び入りて

▽ 現 僧は肝をつぶして、防ごうとするが、力も抜け、足も立たず、小川へ転げ込み、

大谷 「助けよや、猫またよや、猫またよや。」

▽ 現 「助けてくれ、猫まただ、猫まただ。」

雨宮 と叫ば、家々より松どもどもして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。
 ▽現 と叫ぶので、近くの家々からたいまつなどをともして、人々が走り寄つてみると、このあたりでよく見かける僧である。

(四)

小山 「こは、いかに。」

▽現 「これは、どうしたのだ。」

雨宮 とて、川の中より抱き起こしたれば、連歌の賭け物取りて、扇・小箱などふところに持ちたりけるも、水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りけり。

④ 飼ひける犬の、嗜けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

▽現 と言つて、川の中から抱き起こしたところ、連歌の懸賞として手に入れた、扇や小箱などをふところに持っていたのも、水につかっていた。そして、たまたま命拾ひしたという様子で、ほうようにして家に入つていった。

飼つていた犬が、暗いのに飼ひ主だと分かつて、飛びついたということである。

- 1 2の「▽現」の部分を読むのはだれですか。1に基づいて書きなさい。
- 2 2の――線部①から③を、それぞれ現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。
- 3 2の……線部()に入るひらがな一字を書きなさい。
- 4 ――線部④「飼ひける犬の」で始まる一文が種明かしの役割を果たしていることを踏まえて、場面(一)の「猫また」と場面(二)の「猫また」の違いを次の条件にしたがつて書きなさい。

〈条件〉

- 「化け猫」という言葉を二回使つて書くこと。
- 六十字以上、八十字以内にとどめて書くこと。
- ()、「」は、次のように一字分を使つて書くこと。

場	面	(一)
---	---	---	---	---

シート 15 正答例

1 深川

2 ① いう ② おもいける ③ くわん

3 が

4 (例) 場面(一)の「猫また」は、化け猫のことであるが、場面(二)の「猫また」は、
僧が化け猫だと思っ込んでいただけで、実は飼い犬である。(64字)